

夏の大会を終えて 選手のコメント紹介

増居翔太君(3-5)

ピッチャーの増居翔太君(3-5)はこのチームについて「センバツが終わってから周りからの視線や期待で大変だったが、試合の途中で負けていても最後には勝てるチームだと思った」と感想を寄せた。

原功征君(3-6)

ファーストでピッチャーとしても出場した原功征君(3-6)はセンバツからこの夏にかけてを「ずっとピッチャーをしていたが野手もやるようになって、色々なことを知ることができた。さまざまな視点から野球を見れるようになったことが一番の成長だ」と振り返った。

山岡右京君(2-5)

サードで新主将の山岡右京君(2-5)は「自分たちのできることを出し尽くした結果だった。次は自分たちで先輩のリベンジをしたい」と意気込みを見せた。また3年生への感謝を「今まで本当に楽しかった。先輩方には素直にありがとうと言いたい」と打ち明けた。

岡上士門君(3-3)

レフトの岡上士門君(3-3)は「甲子園に行けるかな、と思っていたがこういう形で終わってしまったので、もっと練習しておけばよかったという気持ちもある。しかしそれはもう終わってしまったことなので、後輩たちには頑張ってもらいたい」と思いを託した。

本校野球部は7月8日から7月28日にかけて行われた第100回全国高等学校野球選手権記念滋賀大会に出場し、ベスト8の成績を取めた。ここでは大会を通して活躍した選手のコメントを紹介する。

高内希君(3-6)

主将の高内希君(3-6)は「自分たちの学年は弱く問題ばかりだった。でも甲子園に行けて、勝って、最終的に形にできて、毎日が楽しく濃くて幸せだった」と明かし、後輩には「ここまで来たからには甲子園に出場するしかない。悔しさを忘れずに一から仕切り直してほしい」とメッセージを送った。

朝日晴人君(3-4)

セカンドで副主将の朝日晴人君(3-4)は最後の夏の県大会を「一試合一試合成長していった。厳しい試合を乗り越え団結できた」と振り返り、これまでの野球部での活動を「ずっと負ける時期があり、そのときはしんどかったが何とかやり切れた。良い仲間や先生に出会えて良い経験ができた」と話した。



▲試合に勝利し校歌を歌う選手たち
(写真は7月16日の草津東高校戦)

野寄重太君(3-4)

センターの野寄重太君(3-4)は「センバツが終わった後になかなか勝てない時期があって苦しかったが、同じ学年のみなどで力を合わせてやってこれたのでよかった」と振り返り、後輩には「自分たちより体も大きくて力があると思うので、秋の大会で結果を残してもらってセンバツに応援に行きたい」と期待を寄せた。

宇野圭一郎君(3-7)

ライトの宇野圭一郎君(3-7)はこの大会について「控えから始まる試合もいくつかあった。そのときはサポート役として全力で味方を鼓舞した」と明かした。また後輩には「来年は自分たちよりも上について優勝してもらいたい」とメッセージを送った。

今井伶央君(3-8)

ショートは今井伶央君(3-8)は「センバツで良い経験をさせてもらい、春夏の大会に活かそうとしていた。結果は残念だったが、最後の試合ではコールド負けしそうになっても1点を取ることができて、本当に良いチームだった」と胸中を明かした。



速報新聞

キマグレ

発行所
彦根東高等学校

新聞部
彦根市金亀町4番7号